Research Monograph Series

# 評価・証明・価値の力学

## ――生成の位相存在論におけるレバレッジ構造と個別具体的偶然性――

# The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value:

Leverage Structures and Particular Concrete Contingency in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July, 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka （bigakusha-haha）
Version 1.0, July 2026

# Publication Information

## Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

## License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

## Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value:

Leverage Structures and Particular Concrete Contingency in Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

# Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

# 要旨

本論文は、評価・証明・価値を固定的な判断基準としてではなく、存在生成を方向づける動的な「力（force）」として再定義することを目的とする。近代社会において、学歴、資格、査読、市場価格、アルゴリズムによる評価、SNSにおける可視化指標などは、客観的かつ中立的な基準として理解されることが多い。しかし、それらは現実を単に記述・反映するものではなく、人間の行為や選択を方向づけ、その方向性を社会的必然として形成する生成的な構造として機能している。

本研究は、この構造を「生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）」の枠組みにおいて分析する。生成の位相存在論では、存在は固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用を通して絶えず生成される位相構造として理解される。この立場からすれば、評価や証明は存在を外部から測定する客観的尺度ではなく、存在生成を拘束し、特定の方向へと収束させる生成的な力として位置づけられる。評価・証明・価値は、存在を説明する概念ではなく、存在を形成し変容させる力学そのものである。

さらに本論文は、この力が自己増殖的な性質を有することを示す。評価はさらなる評価を、証明はさらなる証明を、価値はさらなる価値を生成し、やがて実体から切り離された記号同士が相互に価値を増幅し合う自己循環的構造を形成する。本研究では、この構造を金融工学におけるデリバティブのレバレッジ構造との構造的同型性に基づき、「評価レバレッジ構造（Evaluation Leverage Structure）」として理論化する。この構造では、価値は実体への接地を失いながらも、記号間の相互参照によって指数関数的に増幅され、社会全体の行為や制度を方向づける支配的な力となる。

その結果、人間の個別具体的な行為や選択は、自由な創造の結果としてではなく、一般抽象的普遍性によってあらかじめ必然化されたものとして現れる。しかし、そのような必然性に対して人間が抱く違和感は、単なる心理的反応ではなく、既存の評価構造とは異なる存在生成の可能性が現れようとする位相的契機である。本論文は、この違和感をインターフェイス存在論の観点から、異なる位相への接続点として位置づける。

さらに芸術および創造は、この評価レバレッジ構造を可視化し、その自己循環を一時的に中断することで、評価以前・証明以前の個別具体的偶然性を再生成する存在論的実践として理解される。ここでいう偶然性とは、単なる無秩序やランダムネスではなく、新たな普遍性が生成される以前の創発的可能性を意味する。したがって、本論文は、個別具体的偶然性こそが新たな普遍性を生成する根源的条件であり、芸術とはその生成条件を社会の中に再び開くインターフェイスであることを示す。

以上を通じて本研究は、評価・証明・価値を存在の結果としてではなく、存在生成を方向づける力として再定式化するとともに、「評価レバレッジ構造」の概念を導入するこ

とにより、「生成の位相存在論」「インターフェイス存在論」「言語デリバティブ論」を統合する新たな存在論的・社会理論的枠組みを提示することを目的とする。


## キーワード

評価；証明；価値；力；生成の位相存在論；レバレッジ構造；個別具体的偶然性；一般抽象化；個別具体化；自己証明；インターフェイス存在論；存在生成

# 目次

Contents

第1章 評価・証明・価値は力である .....1
第2章 必然性としての一般抽象的普遍性 .....3
第3章 評価レバレッジ構造 .....6
第4章 違和感の存在論 .....9
第5章 偶然性への回帰 .....12
結論.....15
参考文献 .....17
方法論的声明.....20

# 第1章　評価・証明・価値は力である

## 1.1　近代合理主義における評価概念

近代合理主義は、評価・証明・価値を、対象に内在する性質を客観的かつ中立的に記述する基準として理解してきた。学術研究における査読、教育制度における学歴や資格、市場経済における価格形成、さらにはアルゴリズムやSNSにおける可視化指標などは、その代表的な例である。これらはいずれも、存在の価値を測定し、その優劣や正当性を示す尺度として機能していると考えられてきた。

しかし、このような理解は、評価・証明・価値を静的かつ事後的な判断として捉えることを前提としている。その結果、評価は存在を記述するものであり、存在そのものには影響を及ぼさないという暗黙の前提が成立している。

生成の位相存在論は、この前提そのものを再考する。

## 1.2　評価・証明・価値の生成論的転回

生成の位相存在論において、存在は固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用によって絶えず生成される位相構造である。存在は、評価以前に完成した対象ではなく、相互作用の過程そのものとして理解される。

この立場に立つならば、評価・証明・価値は存在を外部から測定する尺度ではない。

むしろ、それらは存在生成そのものを方向づける生成的な力として理解される。

評価とは、人間の行為や選択を特定の方向へ収束させる力である。

証明とは、その力を制度的・社会的に安定化し、再生産可能な構造として維持する機構である。

価値とは、その構造が時間を通じて持続し、さらなる生成を誘発するエネルギーである。

したがって、評価・証明・価値は互いに独立した概念ではなく、存在生成を方向づける一つの動的な力学系を構成している。

## 1.3　評価は存在を生成する

評価は存在の結果として与えられるものではない。

むしろ評価は、人間の認識、選択、制度、経済活動、さらには創造行為そのものを方向づけることによって、新たな存在を生成する。

例えば、ある学術理論が高く評価されることは、その理論を研究する人々を増加させるだけではない。その評価自体が研究資源、制度的承認、教育体系、さらには社会的認識を生成し、新たな存在構造を形成する。

同様に、市場価格は商品の価値を単に反映するものではなく、生産、消費、投資、技術開発といった社会的行為全体を方向づける力として機能する。

評価とは、存在を説明する概念ではなく、存在を生成する力なのである。

## 1.4　力としての評価・証明・価値

以上のことから、本研究では評価・証明・価値を、静的な価値判断ではなく、存在生成を方向づける動的な力として定義する。

評価は行為を方向づける力である。

証明はその力を制度化し、社会的再生産を可能にする力である。

価値はその制度全体を持続させるエネルギーである。

この三者は循環的に作用し合い、存在生成そのものを方向づける力学系を形成する。

この視点は、近代合理主義における評価中心の存在理解を生成論へと転回させるだけでなく、本論文で後に論じる「評価レバレッジ構造」の理論的基盤を与えるものである。すなわち、評価・証明・価値は存在を表象する記号ではなく、存在を生成し、増幅し、変容させる生成的な力として理解されなければならない。

### 基本命題1

評価・証明・価値は存在を記述するものではない。それらは存在生成を方向づける力である。

### 基本命題2

存在生成を方向づける力は、制度を媒介として自己増殖し、評価レバレッジ構造を形成する。

# 第2章　必然性としての一般抽象的普遍性

## 2.1　自由と必然性の生成構造

近代社会において、人間は自由な主体として理解され、自らの意思に基づいて選択し行為すると考えられてきた。この自由意志の概念は、近代合理主義や主体哲学の基盤を形成してきたが、その自由は常に社会的・制度的条件の内部で成立している。

生成の位相存在論は、この「自由」という概念そのものを生成論的に捉え直す。

人間は自由に行為しているように見える。しかし、その自由は決して無条件ではない。あらゆる行為は、すでに存在している評価・証明・価値の構造の内部に位置づけられ、その構造によって可能性の範囲が規定されている。

したがって、自由とは必然性の外部に存在するものではなく、必然性の内部において現象する生成的な契機なのである。

## 2.2　評価構造による必然化

大学を選択すること。

職業を選択すること。

研究テーマを設定すること。

芸術作品を制作すること。

これらはいずれも個人的な意思決定として理解されることが多い。しかし、それらの選択は決して純粋に個人的なものではない。

その背後には、学歴制度、経済構造、学術共同体、市場、文化資本、社会的承認など、多層的な評価体系が存在している。

個人は、その評価体系の内部で自己を位置づけ、その評価構造に適応する形で選択を行う。

つまり、個別具体的な行為は、それ以前に存在する一般抽象的普遍性によって方向づけられ、その結果として社会的必然性を帯びる。

ここで重要なのは、行為そのものが必然なのではなく、その行為を成立させる評価構造が必然性を生成しているという点である。

## 2.3　一般抽象的普遍性という力

本研究において「一般抽象的普遍性」とは、単なる抽象概念や普遍法則を意味するものではない。

それは社会全体に共有され、人間の行為を一定方向へと収束させる生成的な力である。

人々はその力を客観的事実として受け入れる。

しかし、その客観性とは評価構造が長期的に自己再生産した結果にすぎない。

一般抽象的普遍性は、制度、教育、市場、学問、文化、政治などを媒介として個人へ作用し、何が正しく、何が価値あるものであるかを規定する。

その結果、人間は自由に行為していると認識しながらも、その自由そのものが一般抽象的普遍性によって形成されている。

したがって、自由は必然性の対立概念ではなく、一般抽象的普遍性の内部で生成された現象として理解される。

## 2.4　個別具体的普遍性との対比

生成の位相存在論は、一般抽象的普遍性を否定するものではない。

問題となるのは、それが唯一の普遍性として機能し、個別具体的な存在生成を覆い隠してしまうことである。

一般抽象的普遍性は、過去に形成された評価構造を保存し、社会全体の安定性を維持する。

一方、個別具体的普遍性は、個々の存在が自己・他者・環境との相互作用を通して生成する新たな普遍性である。

芸術、創造、発見、発明、あるいは深い実践は、この個別具体的普遍性が生成される契機となる。

しかし、それらは既存の一般抽象的普遍性の内部では、しばしば逸脱や例外として理解される。

本研究は、この逸脱こそが新たな普遍性の生成条件であると考える。

## 2.5　必然性の再定位

以上より、本研究における必然性とは、個々の行為に内在する性質ではない。

必然性とは、評価・証明・価値によって構成された一般抽象的普遍性が、人間の行為や選択を方向づけることによって生成される社会的力学である。

したがって、人間がある個別具体的な行為に違和感を抱くとき、その違和感は行為そのものに向けられているのではない。

むしろ、その行為を必然化している一般抽象的普遍性に対する感覚なのである。

この違和感は、既存の評価構造とは異なる存在生成の可能性が現れようとする位相的契機であり、生成の位相存在論においては、新たな個別具体的普遍性が創発するインターフェイスとして理解される。

# 第3章　評価レバレッジ構造

## 3.1　評価の自己増殖性

前章では、評価・証明・価値が存在を外部から記述する尺度ではなく、存在生成を方向づける力であることを示した。本章では、その力が静的に作用するのではなく、自己増殖的な構造を形成することを明らかにする。

評価は、それ自体が新たな評価を生み出す。

高い評価はさらなる評価を呼び込み、証明は新たな証明を要求し、価値はさらなる価値を誘発する。この循環は単純な反復ではなく、評価そのものが次の評価の前提条件となる再帰的構造を形成している。

したがって、評価・証明・価値は個別に存在するのではなく、相互に増幅し合う自己組織的な力学系として理解されなければならない。

## 3.2　評価レバレッジ構造

本研究では、この自己増殖的構造を**評価レバレッジ構造（Evaluation Leverage Structure）**と定義する。

金融工学におけるデリバティブ市場では、派生商品は原資産の価値を参照しながら新たな価値を生成し、その派生商品がさらに新たな派生商品を生み出すことで、多層的なレバレッジ構造が形成される。

重要なのは、この構造が単なる比喩ではなく、社会的評価の生成構造と同型であるという点である。

社会においても、評価は現実の行為を参照しながら形成される。しかし一度制度化されると、その評価自体が新たな評価の基準となり、さらに証明と価値を生成していく。

つまり評価は、行為を媒介しながらも、やがて評価自身を参照する構造へと移行する。

この再帰性こそが評価レバレッジ構造の本質である。

## 3.3　記号の自己循環

評価レバレッジ構造が進行すると、社会における価値生成は実体から徐々に切り離される。

金融市場において、派生商品が原資産を上回る規模へ拡大するように、社会においても評価そのものが現実の行為を超えて自己増殖を始める。

学歴は学歴を生み、

肩書は肩書を生み、

ブランドはブランドを生み、

引用は引用を生み、

フォロワーはフォロワーを生み、

評価は評価を生む。

この過程では、記号はもはや現実を表象するだけではない。

記号は他の記号を参照し、他の記号を生成し続ける自己循環的な生成空間を形成する。

存在は記号によって説明されるのではなく、記号によって方向づけられるようになる。

## 3.4　指数関数的増幅

評価レバレッジ構造の特徴は、その増幅が線形ではなく指数関数的であることにある。

一つの評価は複数の評価を生み、その複数の評価はさらに新たな評価を誘発する。

この再帰的増殖によって、社会全体は急速に評価空間へと変容していく。

現代の情報社会では、この増幅はデジタルネットワークによってさらに加速される。

アルゴリズムは評価を可視化し、その可視化が新たな評価を生み出す。

ランキングはランキングを強化し、推薦は推薦を増幅し、可視性はさらなる可視性を獲得する。

この自己強化過程において、評価は存在の結果ではなく、存在生成を方向づける主要な力となる。

## 3.5　評価空間としての現代社会

評価レバレッジ構造が高度化した社会では、人間は現実そのものではなく、評価によって構成された世界の内部で行為するようになる。

そこでは、個別具体的な経験よりも、その経験がどのように評価されるかが優先される。

現実の行為よりも、その行為に付与された価値が行為を規定する。

この意味において、現代社会は単なる情報社会ではない。

それは、評価・証明・価値が自己増殖し続ける評価空間である。

生成の位相存在論は、この評価空間を固定的な社会制度としてではなく、存在生成を方向づける動的な位相構造として理解する。そして、この構造に対する違和感や逸脱は、評価レバレッジ構造の外部ではなく、その内部に生成される新たな位相への接続点として現れる。

したがって、芸術や創造とは、この自己循環的な評価空間を一時的に撹乱し、評価以前・証明以前の個別具体的偶然性を再び生成する存在論的実践なのである。

# 第4章　違和感の存在論

## 4.1　違和感はどこから生まれるのか

生成の位相存在論は、人間の存在を固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用によって絶えず生成される位相構造として理解する。この立場からすれば、人間が日常的に経験する「違和感」は、単なる主観的感情や心理的反応ではなく、存在生成そのものに関わる重要な現象として位置づけられる。

一般に、人間はある人物の行為や社会的出来事、制度、作品などに対して違和感を覚える。しかし、その違和感は、表面的には個別具体的な行為へ向けられているように見えながら、その本質的対象は行為そのものではない。

違和感とは、その行為を成立させ、正当化し、必然化している一般抽象的普遍性に対する感覚なのである。

## 4.2　違和感の隠蔽構造

近代社会では、評価・証明・価値が客観性や合理性の名の下に制度化されることで、その制度自体が疑われることは少ない。

ある行為が高く評価されている。

ある人物が権威によって証明されている。

ある制度が社会的価値を持つと承認されている。

そのとき人間は、その評価構造そのものではなく、評価された対象だけを見る傾向を持つ。

評価は対象を説明するだけではない。

評価は対象を正当化する。

証明は制度を維持する。

価値はその構造を自然なものとして社会へ浸透させる。

その結果、人間が本来抱いていた違和感は、合理性や客観性という名の下で覆い隠されていく。

したがって、評価・証明・価値は存在生成を方向づける力であると同時に、その力を不可視化する隠蔽装置としても機能している。

## 4.3　違和感と位相転換

しかし、違和感は完全に消失することはない。

むしろ、それは評価構造が覆い隠そうとする存在生成の可能性が、なお現れ続けていることを示している。

生成の位相存在論において、位相とは固定された状態ではなく、関係の生成様式そのものである。

したがって違和感とは、現在の位相構造と、生成されつつある新たな位相構造との間に生じる境界現象である。

それは既存の秩序に対する単なる否定ではなく、新しい存在生成が始まろうとする兆候である。

違和感は、破壊の契機ではなく、生成の契機なのである。

## 4.4　インターフェイスとしての違和感

インターフェイス存在論では、存在は境界において生成される。

自己と他者。

主体と環境。

現実と記号。

個別具体性と一般抽象性。

これらの境界において、新たな関係が生成される。

違和感もまた、この境界に生じる現象である。

それは現在の自己と、まだ存在していない自己との間に形成されるインターフェイスであり、既存の評価構造と、新たな存在生成との接続点である。

したがって違和感とは、誤りでも未熟さでもない。

それは、存在が自己を更新しようとする生成過程そのものなのである。

## 4.5　芸術と違和感

芸術は歴史的に、美や技巧を生み出す営みとして理解されてきた。

しかし生成の位相存在論において芸術とは、違和感を生成し、維持し、社会の中に開き続ける存在論的実践である。

芸術は既存の評価体系に新たな作品を追加することを目的としない。

むしろ、評価体系そのものを可視化し、その必然性に対して違和感を生成することで、人間が評価以前・証明以前の存在生成へ再び接続する契機を設計する。

したがって芸術とは、完成した価値を提示する営みではなく、価値が生成される以前の位相を社会に開くインターフェイスなのである。

## 4.6　違和感の存在論

以上より、本研究において違和感とは、心理学的な不快感や認知的不一致ではない。

違和感とは、一般抽象的普遍性によって必然化された存在生成に対し、個別具体的普遍性が創発しようとするときに現れる位相的現象である。

それは、既存の評価・証明・価値によって覆い隠された生成可能性が、自らを現象させようとする存在論的契機であり、新たな存在への接続を可能にするインターフェイスである。

この意味において、違和感は否定されるべきものではない。

それは、存在が新たな位相へ移行する直前に現れる、最も根源的な生成の徴候なのである。

# 第5章　偶然性への回帰

## 5.1　偶然性の存在論的再定義

近代合理主義は、偶然性を必然性に対立する概念として理解してきた。偶然とは、因果関係を十分に説明できない出来事、あるいは統計的な揺らぎやランダムネスとして位置づけられ、その価値は限定的なものとされてきた。

しかし、生成の位相存在論は、この偶然性理解を根本から転換する。

本研究において偶然性とは、無秩序や無意味な出来事ではない。

偶然性とは、まだ評価されていない存在生成である。

すなわち偶然とは、既存の評価・証明・価値の体系によって未だ回収されていない生成可能性であり、新たな存在が現れようとする位相的契機である。

したがって、偶然性とは必然性の否定ではなく、未来の必然性が生成される以前の存在論的状態なのである。

## 5.2　評価以前の生成可能性

前章で示したように、評価レバレッジ構造は、既存の評価体系を自己増殖させることによって、社会全体の行為を一定方向へと収束させる。

この構造は社会の安定性を支える一方で、新たな存在生成の可能性を評価体系の内部へと回収しようとする。

しかし、すべての創造は評価の内部から始まるのではない。

真に新しい存在生成は、既存の評価体系では意味づけられない領域から出現する。

その領域こそが、本研究でいう偶然性である。

偶然性とは、評価体系が未だ到達していない存在生成の余白であり、個別具体的普遍性が創発する源泉である。

## 5.3　芸術と偶然性

生成の位相存在論において、芸術とは価値を表現する営みではない。

芸術とは、評価以前・証明以前の偶然性を生成する存在論的実践である。

芸術は既存の価値体系を単純に否定するものではない。

また、既存の評価体系の内部でより高い評価を獲得することだけを目的とするものでもない。

芸術は、評価体系が前提としている一般抽象的普遍性に位相的な裂け目を生じさせ、未だ評価されていない存在生成の可能性を社会の中へ現象させる。

この意味において芸術は、新しい価値を提示する以前に、新しい価値が生成される条件そのものを設計する営みである。

したがって芸術は作品を生産する行為ではなく、存在生成の条件を開くインターフェイスなのである。

## 5.4　偶然性から普遍性へ

偶然性は、そのまま偶然であり続けるわけではない。

ある偶然的な出来事が、人間・社会・環境との相互作用を通して持続し、多様な関係を形成するとき、それはやがて新たな普遍性として定着する。

つまり普遍性は、最初から存在するものではない。

普遍性とは、個別具体的な偶然性が時間の中で社会的に共有されることによって生成される位相構造である。

この生成過程を通して、個別具体的偶然性は個別具体的普遍性へと転化し、さらに社会全体に共有されることで、新たな一般抽象的普遍性を形成する可能性を持つ。

したがって、普遍性とは固定された真理ではなく、偶然性の歴史なのである。

## 5.5　偶然性への回帰

本研究がいう「偶然性への回帰」とは、既存の制度や評価を否定することではない。

それは、評価体系が成立する以前に存在していた生成可能性へと立ち返ることである。

評価・証明・価値は社会に必要な構造である。

しかし、それらが自己増殖し、自らを唯一の普遍性として固定化するとき、存在生成は閉鎖される。

偶然性への回帰とは、その閉鎖された構造を開き、評価以前・証明以前の生成可能性を再び社会へ接続することである。

この回帰は過去への回帰ではない。

それは未来に向けて新たな存在を生成するための回帰である。

## 5.6　偶然性の存在論

以上より、本研究における偶然性とは、単なる確率論的偶発性や無秩序ではない。

偶然性とは、まだ評価されず、まだ証明されず、まだ価値として制度化されていない存在生成そのものである。

芸術とは、この偶然性を現象させ、維持し、社会へ接続する存在論的実践である。

そして、新たな価値とは偶然性の結果ではなく、偶然性が社会との相互作用を通して生成した普遍性である。

したがって、芸術とは評価体系を否定する営みではない。

芸術とは、評価体系が成立する以前の生成可能性を社会へ回復し、新たな普遍性が創発する条件を設計するインターフェイスなのである。

# 結論

本論文は、評価・証明・価値を、存在を客観的に記述する静的な基準ではなく、存在生成を方向づける動的な力として再定義した。

近代合理主義は、評価・証明・価値を中立的な尺度として位置づけてきた。しかし、本研究が明らかにしたように、それらは単に存在を測定するものではない。むしろ、それらは人間の認識、行為、制度、社会構造を一定の方向へ収束させ、新たな存在を生成する生成的な力として機能している。

さらに、この力は自己増殖的である。評価は評価を生み、証明は証明を生み、価値は価値を生み続ける。その結果、評価・証明・価値は相互に自己参照する循環構造を形成し、実体から切り離された記号が記号を増幅する自己組織的な空間を生成する。本研究は、この構造を金融工学におけるデリバティブのレバレッジ構造との構造的同型性に基づき、「評価レバレッジ構造（Evaluation Leverage Structure）」として理論化した。

この評価レバレッジ構造の内部では、人間の個別具体的な行為は自由な創造として現れる一方で、その可能性は一般抽象的普遍性によってあらかじめ方向づけられ、社会的必然性として組織化される。したがって、必然性とは個々の行為に内在する性質ではなく、評価・証明・価値によって形成された一般抽象的普遍性が生成する力学なのである。

しかし、この構造は完全に閉じた体系ではない。人間が経験する違和感は、既存の評価体系への単なる否定ではなく、一般抽象的普遍性によって覆い隠された個別具体的普遍性が創発しようとする位相的契機である。違和感とは、新たな存在生成が既存の位相構造と接触する境界であり、生成の位相存在論においては、新しい存在への接続を可能にするインターフェイスとして理解される。

この観点から、本研究は偶然性についても従来とは異なる存在論的定義を提示した。偶然性とは単なる確率論的ランダムネスではなく、まだ評価されておらず、まだ証明されておらず、まだ価値として制度化されていない存在生成である。偶然性は、評価体系の外部にある無秩序ではなく、新たな普遍性が生成される以前の創発的可能性であり、個別具体的普遍性の源泉である。

芸術は、この偶然性を生成し、維持し、社会へ接続する存在論的実践として位置づけられる。芸術の本質は、既存の評価体系を否定することにも、その内部で高い評価を獲得することにもない。芸術とは、評価以前・証明以前の生成可能性を社会の中に再び開き、新たな普遍性が生成される条件を設計するインターフェイスなのである。

以上より、本論文は、評価・証明・価値を存在生成の力として再定式化し、「評価レバレッジ構造」という概念を導入することで、現代社会における価値生成の力学を存在論的に説明した。そして、この理論を「生成の位相存在論」「インターフェイス存在論」

「言語デリバティブ論」と接続することにより、評価と創造、必然性と偶然性、一般抽象的普遍性と個別具体的普遍性を統合的に理解する新たな理論枠組みを提示した。

本研究において芸術とは、価値を生産する営みではない。芸術とは、価値が生成される以前の位相を社会の中に開き、個別具体的偶然性を通して新たな普遍性を創発させる存在論的インターフェイスである。この視点は、芸術のみならず、科学、技術、教育、経済、人工知能など、現代社会のあらゆる価値生成の過程を再考するための基盤となるものであり、「生成の位相存在論」の理論体系をさらに発展させる新たな方向性を示すものである。

# 参考文献

## Primary Works by Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. *Axioms of Generative Topological Ontology: A Fundamental Theory of the Generation of Being*. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. *The Limits of Self-Externalization and the Generation of Being: Interface Ontology in Generative Topological Ontology*. Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. *Pre-Humanity and Pre-Selfhood: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology*. Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. *The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and the Leverage Structure of Artificial Intelligence Hallucination*. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. *A Generative Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology*. Research Monograph, Version 1.0.

## Evaluation, Value, and Symbolic Power

Bourdieu, Pierre. 1984. *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. Translated by Richard Nice. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Bourdieu, Pierre. 1990. *The Logic of Practice*. Translated by Richard Nice. Stanford, CA: Stanford University Press.

Bourdieu, Pierre. 1991. *Language and Symbolic Power*. Edited by John B. Thompson. Translated by Gino Raymond and Matthew Adamson. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Boltanski, Luc, and Laurent Thévenot. 2006. *On Justification: Economies of Worth*. Translated by Catherine Porter. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Boltanski, Luc, and Ève Chiapello. 2005. *The New Spirit of Capitalism*. Translated by Gregory Elliott. London and New York: Verso.

## Power, Discipline, and Institutions

Foucault, Michel. 1977. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Translated by Alan Sheridan. New York: Pantheon Books.

Foucault, Michel. 1978. *The History of Sexuality, Volume 1: An Introduction*. Translated by Robert Hurley. New York: Pantheon Books.

Weber, Max. 2002. *The Protestant Ethic and the "Spirit" of Capitalism and Other Writings*. Translated and edited by Peter Baehr and Gordon C. Wells. New York: Penguin Books.

Arendt, Hannah. 1958. *The Human Condition*. Chicago: University of Chicago Press.

## Value, Capital, and Economic Structure

Marx, Karl. 1976. *Capital: A Critique of Political Economy*. Vol. 1. Translated by Ben Fowkes. London: Penguin Books.

Marx, Karl. 1988. *Economic and Philosophic Manuscripts of 1844*. Amherst, NY: Prometheus Books.

Simmel, Georg. 2004. *The Philosophy of Money*. 3rd enlarged ed. Translated by Tom Bottomore and David Frisby. London: Routledge.

Polanyi, Karl. 2001. *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*. Boston: Beacon Press.

Baudrillard, Jean. 1981. *For a Critique of the Political Economy of the Sign*. Translated by Charles Levin. St. Louis: Telos Press.

## Pragmatism, Experience, and the Generation of Value

Dewey, John. 1934. *Art as Experience*. New York: Minton, Balch & Company.

Dewey, John. 1920. *Reconstruction in Philosophy*. New York: Henry Holt and Company.

James, William. 1907. *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*. New York: Longmans, Green, and Co.

Mead, George Herbert. 1934. *Mind, Self, and Society*. Chicago: University of Chicago Press.

## Being, Difference, and Generation

Heidegger, Martin. 1962. *Being and Time*. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. Oxford: Blackwell.

Deleuze, Gilles. 1994. *Difference and Repetition*. Translated by Paul Patton. New York: Columbia University Press.

Whitehead, Alfred North. 1978. *Process and Reality: An Essay in Cosmology*. Corrected ed. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne. New York: Free Press.

Simondon, Gilbert. 2020. *Individuation in Light of Notions of Form and Information*. Translated by Taylor Adkins. Minneapolis: University of Minnesota Press.

# 方法論的声明

**——研究覚書の公開に関する方法論的声明——**

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。